

文献紹介

高橋陽一 著

『近世旅行史の研究 信仰・観光の旅と旅先地域・温泉』

清文堂 2016年8月 451頁 9,800円＋税

著者の高橋氏は、東北大学文学部日本史研究室を卒業され、本書第二章に収録された「多様化する近世の旅」は、確か卒業論文が原型となったものである。

というのは、この論文が刊行される少し前に、東北大学日本史研究室のメンバーなどで構成される東北近世史研究会の場で、評者と著者の二人が、道中日記に関する報告を行った。当時は交通史研究の大家として知られた東北大学名誉教授の渡辺信夫先生も、お元気で参加され、いろいろな議論を交わした記憶がよみがえる。

その後、この分野の研究を蓄積した著者が、それらを集大成して、世に問うたのが本書である。まずは、構成を簡単に紹介しよう。

課題と方法を述べた序章に次いで、第一部は旅行者論と題され、第一章 旅の行程とその特徴、第二章 多様化する近世の旅、第三章 石碑のある風景、第四章 道中日記にみえる庶民の観光、第五章 近世の温泉利用とその特性、からなる。

続く第二部 旅先地域論は、第六章 近世の旅先地域と諸営業、第七章 旅先地域と客引き、第八章 近世の温泉運営と領主、第九章 近世の温泉と領主政策、からなり、最後に終章 本書の成果と課題、で結ばれ、巻末には索引も付されている。

序章では、最初に本書の意図として、旅行史研究全体の体系化という気宇壮大な目標が掲げられる。そして、よく整理された研究史のまとめが行われ、成果と問題点が指摘される。

その上で、本書の課題と構成が述べられ、全体を通してのキーワードとなる「観光」が「非日常的な余暇行動の中で、楽しみを享受すること」と定義される。

第一章では、数多くの道中日記を年代別などに分類した図表を交えた考察が行われる。その成果として、たとえば、従来の研究では、西国巡礼型

が上方周回型に先行すると指摘されてきたが、いずれも近世後期にピークを迎えており、旅の遊楽化という従来の研究史の指摘は必ずしもあてはまらないとする。

また、旅行者の年齢についても分析が行われている。その結果として、成人儀礼ではなく、青年・壮年期の旅であるとするが、東北地方からの伊勢参り道中日記に限定された史料であるため、あくまでもその制約の中での位置づけとみるべきであろう。

一方、意外だったのは、松島旅行者の分析で、芭蕉の五〇回忌を契機に、松島に来訪する俳人が増えるが、『おくのほそ道』と全く同じ行程をたどった例は見当たらない、とする指摘である。

かつて、評者が出羽三山参詣の行程を道中日記から分析した際に、芭蕉の特異な行程を、後世の俳人がたどった例がみられることを指摘したのだが、行程全体をたどった例が皆無であることを明らかにしたことは有意義といえよう。

次いで、第二章では、伊勢参りを西国巡礼型と上方周回型に大別する中で、上方周回型は京都来訪の最後に禁裏参りを行っている例が多いことから、伊勢参宮が上方に入る最初の儀礼であり、禁裏参りが上方巡りの最後の儀礼に相当するとの指摘は、たいへん興味深い。

この京都における旅行者の行動については、最近の谷崎友紀「旅人の属性による名所見物の特徴—武蔵国から京都への旅日記を事例として—」人文地理69-2、2017に継承され、さらに具体的な分析が進められている。

第三章の風景論の節においては、日本三景の一つである松島の風景観が検証されているが、地理学における風景論は、さほど参照されておらず、歴史地理学の役割として、より明快で他分野からも理解が容易な風景論を新たに取りまとめる必要性を感じた。

ところで、本章で対象とされている松島の雄島は、板碑の多く存在する中世以来の霊場として著名であるが、先述の来訪する俳人の増加にともない、句碑が数多く建立されたことが指摘され、それらの林立する石碑に対して、雄島を訪れた旅行

者の中には嫌悪感・忌避感を抱く者がいたことに着目する。そのような紀行文を残したのは、儒学者や国学者であることが特徴であり、学者にとっては俳諧を下位の俗文芸とみなす価値意識が存在していたという見解は、道中日記と紀行文の差異および近世の知識人を理解する上で、貴重なものといえよう。

第四章で、関心を引いたのは、道中日記の内容の定型化に関する考察である。後から旅をする他人に読ませるために記されたものであるという見解は既にみられるが、それに加えて、庶民が社会教養を備えるための公共的地域情報誌・社会教材としての性格を持ち合わせていたゆえ、との指摘は、今後の近世史研究における新たな課題として展開するのではなかろうか。

そして、第四章の最後では、観光のまなざしについて論じられる。大衆的な観光のまなざしは、「集散的まなざし」として近世における庶民の非日常的な感動体験にすでに表れているのではないかと、と著者は述べるが、この点については、かつて本学会のシンポジウムでもとりあげたように（共同課題「旅・観光・歴史遺産」特集号、歴史地理学57-1, 2015）、近世から近代への移行期について、さらに慎重な調査研究を重ねる必要があるように思われる。

第五章では、温泉旅行に話題が転換して、近世の温泉については、医療行為としての面と、観光・文化的営為としての温泉滞在に二分されるとする。

その上で、入浴の心得として温泉「養生」が強調されていたことを明らかにしている。さらに、各種の文献などの比較から、養生には外出行動や趣味・自然鑑賞までが含まれていたことを示している。

ただし、歴史学における温泉旅行の研究史は浅く、新たな課題・論点の提起に追われたことを認めており、歴史地理学を含めて、今後の重要な課題であることは疑いない。

次に、第二部の旅先地域論の紹介に移るが、ここでは、群馬県の草津温泉および宮城県仙台市の秋保温泉の事例を中心として、論が展開されている。

いずれの地域においても、18世紀後半の災害および飢饉にともない、それまでの温泉地の性格が大きく変化する姿を、諸史料から実証している。詳細な分析については、評者の手に余ることから言及は避けたいが、信州浅間山の噴火活動および天明の大飢饉が、温泉地にも大きな影響を及ぼした。

以下は、評者の感想にとどまるが、まず「旅先地域」という表現が、いまひとつなじまないように思われる。文中には、観光地という表現も散見するのだが、とりわけ観光地化という表現は、評者がかつて調査した長野県戸隠村（現・長野市）の事例のように、近世以来の宿坊集落が高度成長期に民宿などの増加によって、その性格が大きく変化したというような印象が強い。果たして、近世後期の温泉集落の変化を、観光地化とまで言い切れるのであろうか。

また、第一部とのつながりからすれば、第一部で取り上げた旅の記録の大部分は、参詣と巡礼のものであり、それに対して、第二部の旅先地域論で扱われるのは、温泉地の事例がほとんどである。

すなわち、第一部では、より積極的に温泉の旅の記録を掘り起こすべきであり、第二部では、参詣・巡礼地の地域変化に関して掘り下げることが必要といえよう。

もちろん、これらは史料上の制約も大きいことから、今後の歴史地理学界をも含めた共通の課題であるといえよう。その道筋を示した本書の意義は高く評価される。

なお、温泉地の変化と同じく、庶民の旅の流行もまた、18世紀後半以降にみられた現象であり、これらに何らかの関係性は、ないのだろうか。あまり議論されたことはないのかもしれないが、以前から個人的に気にかかるのは、たとえば天明の大飢饉で亡くなった人びとへの供養が、参詣や巡礼の旅の動機のひとつになったのではあるまいか。

最後に、本書の刊行後、著者の編による『旅と交流にみる近世社会』が、2017年3月に同じ出版社から刊行されていて、8名の執筆者が健筆をふるっていることを記して、紹介を終えたい。

（岩鼻通明）